

鏡の前に、クリーニングしたてのスーツを纏った俺が映る。髭の剃り残し、なし。寝癖、なし。三十数年見慣れたいつも通りの顔がいた。少し端の欠けたガラスは、誰のものかもわからない指紋で汚れている。

あ、ネクタイ曲がってる。……いいか、まあ。

「佐藤、鏡使わして。もうすぐ出番だし」

にゅつと肩口から顔を出した俺の相方、潮田が顎をなぞっている。腕時計で時間を確認すると、そろそろ舞台袖に移動しなくてはならない頃合いだった。ふと楽屋を見回すと誰もいない。皆舞台袖で他のコンビの見学でもしているのだろうか。

「なあ、俺変なところある？」

「え？ ないよ、大丈夫」

前髪を撫でつけながら潮田がおざなりに答えた。視線はまったく一致しない。大丈夫、大丈夫か。歪んだ結び目も、今の俺達も、大丈夫か。

「行こうぜ」

電灯のスイッチの近くの壁が少し剥けている。

舞台上を俺達の出囃子が塗りつぶす。十年ちよつと聞いてきた曲に合わせて舞台袖から飛び出すと、センターマイクが光を浴びていた。客席から見て俺が左、潮田が右。湧き上がる歓声と拍手が会場に響く。

「どうも、階段シックスティーンです！」

収容人数が二百人にも満たない会場だと、客席がよく見えた。俺達をじっと見てくれる人。明らかに興味を示さない顔をしている人。スマートフォンを弄っている人。ちらほら見える空席にアンケート用紙やライブの宣伝チラシが置いてある。

この光景も何百回、いや何千回と見てきた。こなれた

かけ合いを続けて、意図したタイミングで笑わせて、最後に深々とお辞儀する。昨日もそうだった。明日もたぶんそうするだろう。

「いや、もういいです。どうもありがとうございました」

潮田の台詞で自分の頭が勝手に下がる。はけた舞台袖で、同じ事務所の後輩が「お疲れさまです！」と会釈をくれた。お疲れさまと言われても、疲れるようなことをした覚えはないのだが。

楽屋へ向かう俺の背後で感嘆混じりのどよめきが起る。そういえば俺達と入れ違いに舞台に飛び出した若手は、テレビに引っぱりだこの人気実力派だった。

アパートの畳に胡坐をかいて、買ってきた弁当を広げる。ライブ後の飲み会はなんとなく断った。寒さにしびれた手で割り箸を割ったら少し失敗した。静かな空気がうるさくて、テレビをつけて音量を上げる。なんでもいから騒がしくしたかった。ついでにスマートフォンで俺達のエゴサーチを始める。階段シックスティーン、二回ほどタップミスをして手こずりながらも、なんとか検索をかけた。

『今日も階段シックスティーン最高！ なんか、この二人にしかない面白さって感じがすごく好き。全世界気つけ！』

『階段シックスティーンのネタ、巧くなった。もっとメディア露出が増えればいいんだけど』

『いつか階段シックスティーンが賞レースで飄々と決勝進出して舞台沸かせるの待ってるから』

適当に合わせたチャンネルでは、俺達よりずっと若手が堂々と輝いていた。結成四年目とかそこらへんの、才能のカタマリがひな壇の前の方に座っている。片や俺は

安アパートの畳だ。日に焼けてだいぶ色褪せている。

買ったきた伍ビールが手のひらを結露で濡らしていた。

エゴサーチして得た『階段シックスティーン』と、俺達はもしかして別ものなんじゃないだろうか。若手が跳ねるテレビのオーディションには落ちて、ライブは最早流れ作業のようにこなしている。いい年をして未だにバイトして生計を立てている。結婚もしていない。賞レースの類はそろそろ結成年で引つかかるだろう。営業はなかなか呼ばれないし、やっと呼ばれたと思えば誰かのバスターだ。これで大丈夫なのだろうか。駄目だよなあ。

「やめちまおうかなあ、もう」

呟いた声は、どっと笑い声を届けるテレビでも、プルトップを開ける音でも誤魔化しきれなかった。

どうも最近、自分の進んでいる道に不安を覚えることが増えた。まっすぐな道から外れてしまった現状が、少しずつ俺の未来を暗く塗りつぶしている。

潮田はこういうとき何を考えているのだろうか。辞めたいとか、解散したいとか、そういう考えが頭によぎったことはあるのだろうか。売れない現状に何を思うのだろうか。コンビ組もう、と強引に引つ張ってしまった俺のことを、彼が恨む日は今までであったのだろうか。

「人生うまくいかねえな」

半分ほど減った硬い白米をつつく。箸があまり進まない。ビールをあおって無理やり流し込む。

ふとテレビに視線をやると、既にエンディングへ差し掛かっていた。

『階段シックスティーン佐藤です。本日の事務所ライブ、まだまだ取り置きお待ちしています』

最近』と』と入力すると、予測変換が勝手に取り置き

を求めてくれるようになった。いつも通りの定型文をインターネットの海に流していく。俺達よりだいぶ若手の知り合いは、チケット発売と同時に完売が当たり前になっているらしい。遠い世界の話だ。同じ職業で生きていくはずなのになあ。

新宿の街を踏みしめる足が重たい。この喧騒の中、俺達を知っている人はどれぐらいいるんだろう。ライブシーンでは引つ張りだこという自覚があるが井の中の蛙だ。ひとたび世間に放り出されると、所詮ただの一般人。

「なんだかなあ」

独り言が思ったより大きかったらしく、側を通り過ぎた人と目が合った。なんだこの人、みたいな表情をされて、すぐに逸らされる。やっぱり気づいていない。

「……なんだかなあ」

赤信号に躓いて立ち止まると、視界が少しぼやけた。

やっと着いたライブ会場の楽屋に身体を滑り込ませる。がやがやとした人のざわめきをなんとか躲しながら、誰も使っていない椅子を自分のもとへ引き寄せた。大きな鞆の口を開けて、商売道具をハンガーポールに吊るしてゆく。相方はどうやらまだ来ていないらしい。

「佐藤、お疲れ」

「うい、お疲れ」

肩を叩かれて振り返ると、同期がへらへら笑って突っ立っていた。ライブシーンでよく会う奴で、メディアでの露出度は俺達と同じくらい。自分が先に売れるって馬鹿みたいに笑い合って十年とちよつと。よく見ると、彼の瞳は暗く淀んでいた。

「潮田は？」

「知らね。……合わせる時間までには来るだろ」

辺りにはネタを合わせる後姿が点在していた。きらきらした瞳が、壁に向かって己の面白さをぶつけている。もう一回、もう一回とタイマーや台本を見つめ直す姿が眩しいくらいだった。食欲に壁に向かうなんて、そういうはずっとしていない。

「佐藤、あのさあ」

「なに、金か？ それとも俺とツーショット？」

「違う」

茶化した声がぴしやりと叩き落とされる。

「……大事な話？ ここで話していいの？」

力なく頷くその姿を見つめながら、自身の軸がぶれているのを何となく感じていた。何人見てきただろう、こういう姿。いつまでも慣れない空気の張り詰め方に息がしづらくなる。だいたいその唇が紡ぐのは、借金か、スキャンダルか、あとは。

「……やめようと思つて、もう」

「あー……そっか」

俺の持論だが、芸歴が十年を超したというのは、ちょっとしたポスターラインでもある。三十歳を迎えて、光のように若手が飛び出していくのを見つめるばかりの、そんな時期。安い酒でいくらでも口から飛び出していたあの頃の夢をひとつも叶えられていないな、と立ち止まる時期。冠番組、レギュラー、ラジオ、エトセトラ。描いていた『売れる未来』と自分を比べてしまうのだ。

「もういつまでやつても売れねえし、だんだん自分に自信が持てねえんだよ」

「自信か」

「そ。あーでも、やっぱり売れてみたかったわ」

先程と似た、へらへらとした笑み。じゃあそれだけだから、と言つて振られた手。俺もいつかあんなふうにな

るのだろうか。

身に纏ったワイシャツが、俺には不釣り合いなほど白くまばゆくて、目の奥が熱くなった。

待ち合わせ時間にいつものネタ合わせ場所である階段の踊り場へ向かうと、潮田は暇そうに液晶を弄っていた。真つ白なワイシャツの第一ボタンが開いている。着てここまで来たのだろうか。じつと見つめていると、不思議そうに首を傾げられた。

「合わせるんじゃねえの？」

早くしようぜ、と急かされて、慌てて彼の隣に駆け寄る。今日はなんのネタにするか、と逡巡してはみるが、うまく頭が働かない。つるつるした壁を指でなぞって、必死に言葉を探す。何か言わなければ、と思うほど喉が締め付けられて声が出てこない。横から刺さる潮田の視線が痛かった。

「佐藤、なんかあった？」

「いや、なんかあってほじやないんだけど」
「……」

「潮田はさ、この仕事辞めたいと思っただことある？」

わずかに見開かれた潮田の瞳に、蛍光灯の光が注がれた。

先輩や同期、後輩がこの世界から消えてゆく度に、自分の影も薄くなってしまうように思える。潮田が隣に十年以上も並んでくれていることがありがたいのと同時に、彼の人生の灯りをひとつずつ消している実感に怯えている。彼が普通に生きていたら歩めるはずだったまっすぐな道を奪ってしまったことを後悔している。自分が一番だという自信もいつからかぐらついていた。こんな俺が他人の人生を決める立場にいいのか。

「え、ないけど」

存外あっさりと返ってきた彼の答えは、真一文字に引き結んだ俺の唇をぽかんと開かせた。

「ない？ ないの？」

「うん」

「本気で言ってる？」

「本気だよ」

なに言ってるんだよ、と呆れ声が投げられる。微かに笑いも混じったその声に、胸の中心が息を吹き返した。

「だって俺、お前が一番面白って知ってるし」

得意そうに潮田の瞳が細められた。ぶれていた軸を元に戻すその言葉は、なんでもないように扱われる。じんわりと身体の末端まで熱が通った。

「俺が、一番面白い？」

「そうじゃなかったらコンビ組んでねえよ」

いよいよおかしそうに潮田が破顔する。当たり前のことを言うように彼の口から飛び出てくる、俺を立たせるための言葉。首を絞めていた何かがそっとほどけた。

壁に凭れて笑う潮田の身体を包む白が眩しい。

「……まあ、この仕事してなかったらどうなってたろううって思うことはあるよ。普通にサラリーマンでもやってたら今頃なにしてたかなって。思うだけだけど」

煙草吸っていい？ と青緑がかった小さな箱を振るから、小さく頷く。潮田がこの場所で煙草を吸うのを見るのは初めてだ。揺らぐ橙と赤、焦げていく白、昇っていく薄い灰色。微かにメンソールの匂いが香った。

「でも俺はたぶんこの仕事を選んでたと思っわ」

まともに社会に出れる気がしねえ、と自嘲しみて潮田は口角を上げた。じゅ、と携帯灰皿にまだ長い煙草を押し付ける。

「佐藤は？」

「え、俺吸わないけど」

「違うよ、この仕事辞めたいと思っただことあるの？」

例えるなら観客の前へ飛び出す五秒前。もしくは、大きなオーデイションでマイクの前に立った瞬間。そのよくな時に特有の、ひやりと背中を撫で上げるあの感覚が俺を襲った。まっすぐ見つめてくれる潮田に申し訳ないような気もするが、どうしたって嘘はつけない。

「……ある」

「あんのかい」

「ごめん、と頭を下げると苦笑された。別に謝ることではないだろうと言ってくれる彼の目は、昔と変わらず黒くて澄み切っている。俺の目は、まだ彼と同じだろうか。

「テレビつけたら後輩が映るし、ライブも惰性で出てる感が強いし、周りは辞めていくし。あと、まあ、売れてねえし」

光の灯る瞳に促されるまま、すべてを吐き出したい。

「……潮田に申し訳ない気がしてる」

「は？」

「このまま売れなかったら、お前の人生真つ暗じゃん。なんか、無理に付き合わせちゃったっていうか」

眉間におもいつきり皺を寄せた潮田が、待ったをするように手のひらをこちらへ向けた。心底呆れたと言わんばかりにため息がひとつ。

「俺は、お前の人生に付き合わされている気は、ない」

一言ひとことが鼓膜を震わせた。押し黙った俺に対して、潮田が言葉が続ける。

「さっきも言ったけど、俺は佐藤が一番面白いと思ってるからコンビを組んでる。そりゃあ誘ってくれたのはお前だけど、お前に言われたからとかそんな理由じゃない。

俺の意志で決めたことだから。付き合わせたとかそんなこと言うな」

珍しく潮田の語気が強い。まくし立てるように飛び出された言葉を丁寧な飲み込むと、目の前の男が滲んでしまいそうになった。うだうだと勝手に後ろめたさを抱えて背中を丸めていた俺の隣で、彼はずっと背筋を伸ばしていたのだろう。

「あと、俺の人生の今後を勝手に真つ暗にするな。それも俺が決めるから。佐藤が真つ暗だと思っけていても、俺がどう思うかはわかんねえだろ」

うん、と首を動かすと、やっと潮田の眉間が元通りになった。

「俺はやりたくて佐藤とコンビ組んでるわけだし、そこに申し訳なさを感じる必要はないよ」

「……」

「二回目だけど、謝ることじゃないだろって」

「あ……ありがとう」

絞り出した俺の言葉に、潮田が歯を見せて笑う。つられて頬を緩めると、胸につつかえていた塊がすんと定位置に納まった気がした。心臓のあたりを撫でると確かに鼓動がわかる。ワイシャツの白も自身に馴染んでいる。

もう一本、と潮田が啜えた煙草の香りが、あたりに柔らかく広がってゆく。そういえば以前この煙草について彼と話をしたことがあった。ほろ苦さもあるが吸いやすく、後から少しだけ甘味が感じられるのが好きだ、と。

喫煙者ではない俺にとって吸う理由はわからないが、吐き出される煙の匂いは心地よかった。

「よし、じゃあネタ合わせしようぜ」

「おう。……今何時？」

「え？」

スマートフォンで時間を確認すると、いつものネタ合わせの時間はとくに過ぎていた。そればかりか、そろそろ身支度を整えなければ出番に間に合わない頃合いだ。喋りすぎた、と潮田に画面を向けると彼の瞳にも焦りが見える。

「まづいな、なんのネタにする？」

「喫茶店のやつでいいこう。掴みの後にそのままネタ入っちゃっていいから。オチはこつちで調整する。あとは袖でちよつと確認しよう」

「わかった」

どたばたとやり取りをしながら階段を駆け下りていく。頭の中で今日のネタの流れを確かめていくと、しっかりとオチまでたどり着けた。染みついた感覚も役に立つことがあるもんだ。こんなときだけは芸歴を積んだことがありがたく感じられる。

結局その日はなんとかやり過こし、ライブ終わりの打ち上げにも参加した。世間では大人気のバラエティーがやっている時間帯に、ぎやあぎやあとはしやぎながら安い酒を傾けた。終電の時間ぎりぎりまで飲み騒いだおかげで、どこの番組のエンディングも見なかった。

泥のように眠りこけた後には、またライブがやってくる。下北沢には今月何回来たんだっけか。決まった道を通りながら指折り数えて、片手では数え切れなくなって止めた。スマートフォンで予測変換は「相変わらず」との一文字だけで勝手に取り置きを求めてくれる。

「あれ、潮田一人？」

いつも人がひしめき合っている楽屋に、相方がひとりぼつんと座っていた。ハンガーポールにかかっているジャケットを少しずらして自分のものを吊るす。

「まだ皆来てない。俺たちが楽屋一番乗りだわ」

「一番乗りか」

白い盾に袖を通しながら、ちらりと潮田を盗み見る。小さな画面に目を落とす彼の背筋はまっすぐで、舞台上に立っているときと何ら変わりなかった。ライトのまばゆい光が、楽屋の安っぽい蛍光灯に変わっただけ。俺と揃いの衣装。柄違いのネクタイ。磨かれた革靴。

あんなまじめな話をした次の日であっても、特に何も変わらない。俺達は相変わらず売れていないし、ライブチケット即日完売なんておとぎ話の世界だ。会場の大きさがだつて突然千人単位になるはずもない。それでもまた収容人数が二百人にも満たない小さな会場に、俺達の出囃子を鳴らすのだ。昨日も今日もきつと明日も。いつか一発大逆転のハッピーエンドを信じて。

「あ、今日のネタ順もう貼ってる？」

「その壁に貼ってあった」

言われた壁を確認すると、俺達はいつも通りの位置にいた。先陣を切って飛び出すいくつかのテレビで見た若い彗星。奥に控える、単独を開けば満員御礼の大スター。それらに挟まれる『階段シックスティーン』の十文字。やはり世界は簡単に変化などしていない。今日もまっすぐから外れて生きている。でも、そこに光がある。

「今日はちゃんとネタ合わせような」

昨日を持ち出して潮田が笑う。そのまっすぐな佇まいに倣って俺もなんとなく背筋を伸ばしてみた。鏡に自分の姿を映すと、見慣れた顔の、見慣れない生き物がいた。

そのまま流れて身だしなみを整えていく。ワックスで髪を撫でつけ、顎をなぞって髭の剃り残しがないか確認した。ネクタイの結び目を掴みかけて、逡巡して潮田に向き直る。

「なあ、俺変なところある？」

「ん？」

「ネクタイとか」

弾かれたように顔を上げた潮田の瞳が、まるく見開かれる。穴が開きそうなほど見つめられた後、彼は小さく首を振った。

「大丈夫、ちゃんとまつすぐだから」